

蒼洋の城塞2

豪州本土強襲

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

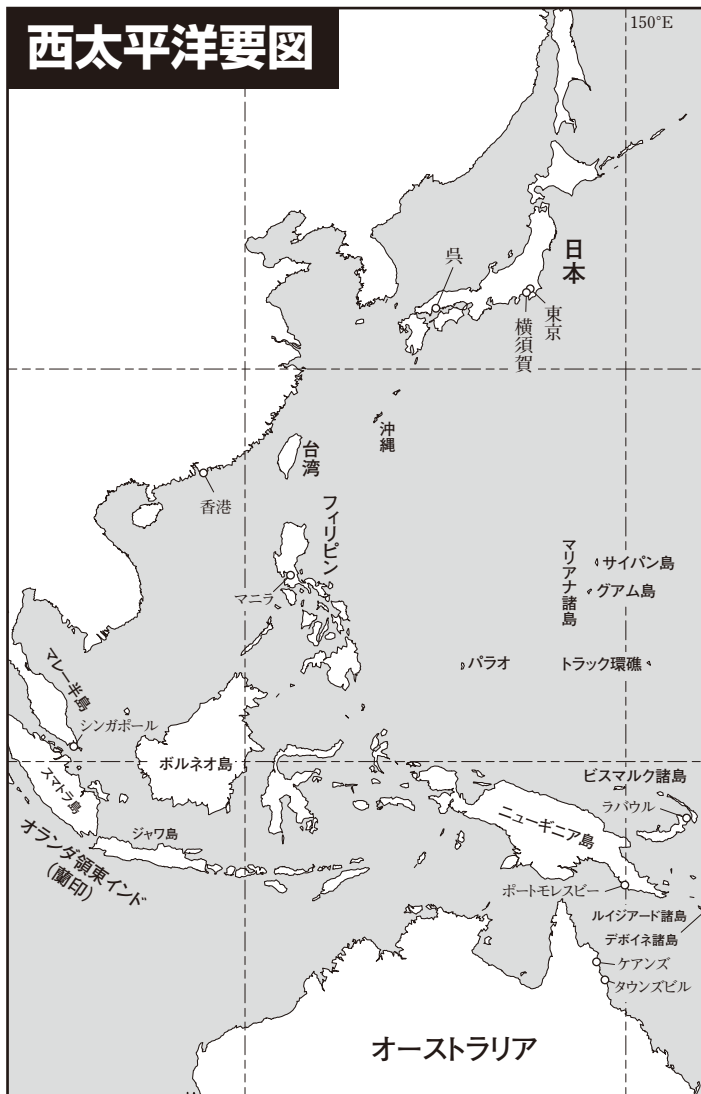
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	反攻の萌芽	9
第二章	「エンタープライズ」急襲	43
第三章	南海の刺客	69
第四章	第八艦隊奮迅	113
第五章	第二次珊瑚海海戦	155
第六章	はためく英国旗 ユニオンジャック	237



西太平洋要図



蒼洋の城塞

豪州本土強襲

2



第一章 反攻の萌芽

1

「蟻の群れみたいだ」

元山航空隊二番機の機長と主操縦員を兼任する大泉耕三特務少尉は、一式陸上攻撃機の操縦員席で、そんな感想を漏らした。

コクピットから見えるツラギは、ソロモン諸島の中央に位置するフロリダ島の南側にある小島だ。

去る五月五日、M O作戦の一環として日本軍が攻略し、飛行艇部隊である横浜航空隊が進出していた。いずれは水上機基地を拡大し、ソロモン諸島における対潜哨戒や索敵に活用する予定だった。

そのツラギが、この日——五月二七日早朝、米軍に急襲された。

島の南岸に群がった米軍の艦艇は、三〇隻は下らない。

上空からは、多数の蟻が巨大な獲物に取り付いて、

巣穴まで運ぼうとしているように見えた。

「こりゃあ、威力偵察じゃないですね。ツラギを取り戻しに来たことは、はつきりしてますよ」

主偵察員を務める森和久飛行兵曹長の声が、伝声管を通じて届いた。

森は機首の爆撃手席に入っているため、操縦員席よりも海面がよく見えるのだ。

「同感だな」

と、大泉は応えた。

「敵の規模は不明であり、単なる威力偵察なのか、本格的な反攻の開始なのか、まだはつきりしない。現在の情勢を考えれば、威力偵察の可能性が高いと考えられるが、芽は早い内に摘み取るに越したことはない」

出撃前、元山空が所属する第二二航空戦隊の司令官吉良俊一少将は、搭乗員たちにそう訓示したが、その言葉が根柢のない樂觀だったことは、敵の規模を見れば明らかだ。

米軍はツラギを取り戻すべく、大兵力を投入して来たのだ。

「『突撃隊形作^トレ』受信！」

主電信員の岩谷平古^{いわたにへいこ}一等飛行兵曹が、エンジン音に負けぬほどの大音声^{だいおんじやう}で報告した。

大泉はスロットルを開き、隊の先頭に出た。

大泉機は嚮導機^{きやうどうき}だ。先頭に立つて元山空の一式陸攻二二機を敵艦隊^{ていけんたい}の上空に誘導し、爆弾を二斉^{いっせい}に投下させる役割を担^{にな}っている。

指揮官機以上に重要な役割だ。

「敵は荷揚げ中^にです」

「静止目標^{せいじきく}ということだな」

森の推測^{すいそく}を受け、大泉は言った。

元山空の一式陸攻は、五〇番一発を搭載したものと二五番二発を搭載したものが半々だ。

水平爆撃は命中率が低いが、静止目標なら、ある程度の命中精度を確保できる。

特に、森は特技章^{とくぎしやう}を持ち、陸攻隊の中でも屈指^{くっし}

の水平爆撃の名手だ。

「左に一〇度変針^{へんしん}。敵が密集^{みっし}しているところを狙います」

森が指示を送って来た。投弾^{とうたん}を終えるまでは、森が事実上の指揮官だ。

「左に一〇度変針。宜候^{ようそう}！」

大泉は、操縦桿^{そうじゅうかん}を左に倒した。

一式陸攻が左に旋回し、機首が敵艦船群の中央を向いた直後、編隊^{まゑじようほう}に動きが生じた。

陸攻隊の前上方^{まえじやうほう}に展開していた第二航空隊の零戦^{れいせん}が、次々と右旋回をかけている。

切り離された落下式増槽^{ごうそう}が、振り捨てられるように海面へと落ちてゆく。

「敵機か！」

大泉は舌打ち^{したう}した。

ツラギの通信基地は、この日の四時二五分から四時三五分にかけて、

「敵機動部隊見ユ」

「敵機動部隊二〇隻、『ツラギ』二来襲空爆中」

「空襲ニヨリ大艇全機火災」

「敵空母一、巡洋艦四見ユ」

といった報告電を続けざまに送り、米艦隊が最低一隻の空母を伴っていることを、ラバウルに報せている。

その空母から発進した直衛機が、攻撃隊に向かつて来たのだ。

編隊の右方では、猪を思わせるずんぐりした形状の機体が、上下に、あるいは左右に飛び交い、零戦と銃火を交えている。

グラマンF4F、ワイルドキャット。

開戦以来、何度も日本機と手合わせした、米海軍の主力艦上戦闘機だ。

零戦は、右に、あるいは左に旋回し、F4Fの背後に回り込む。

両翼に発射炎が閃くや、二〇ミリ弾の真つ赤な火箭がほとばしり、F4Fの主翼や胴を貫く。

主翼を叩き折られ、片側の揚力を失ったF4F

は、錐揉み状に回転しながら墜落し、胴体を掻き裂かれたF4Fは、よろめきながら姿を消す。

コクピットに一撃を喰らったF4Fは、火を噴き出すこともなく、まっすぐ海面へと落下する。

エンジンを撃たれたF4Fは、黒煙を噴き出しながら、急速に高度を下げてゆく。

全般に、零戦が優勢だ。

ラバウルからツラギまで、約三時間半を飛んだ後だが、疲れた様子は見せない。

卓越した格闘性能を活かし、敏速に飛び回って、F4Fを一機、また一機と仕留めてゆく。

その零戦も、F4F全てでは阻止できない。

何機かが零戦を振り切り、陸攻隊に肉迫して来る。大泉はF4Fの動きを睨みつつも、針路を変えず、

回避運動も行わない。編隊の嚮導中に、針路を変えるわけにはいかない。

F4F二機が、右前方から迫る。太く丸っこい機

体が、みるみる距離を詰めて来る。

F 4 F の両翼に発射炎が閃く寸前、大泉は機体を大きくバンクさせた。

一二・七ミリ弾の青白い曳痕が、主翼の真上や翼端付近を通過し、後方へと流れた。

大泉機の機首、胴体上面、右側面から、三条の火箭が、F 4 F の面前に放たれるが、敵機は速力を落とすことなく離脱する。

一番機に続いて、二番機が迫る。

大泉が再び機体を振るべく身構えたとき、F 4 F の後方から太い火箭が突き込まれた。

F 4 F の主翼といわず、胴体といわず、真つ赤な曳痕が突き刺さった。左右の水平尾翼が二枚とも吹っ飛び、F 4 F は大きくよろめきながら姿を消した。

たった今、F 4 F を墜とした零戦が、大泉機の右前方で左旋回をかける。「敵機は墜としたぞ」と、合図をしたように見えた。

大泉が右手の拳で額の汗を拭ったとき、編隊の前

方で続けざまに爆発が起こり、黒々とした爆煙が湧き出した。

敵艦隊の対空射撃だ。

輸送船と護衛艦艇中心の部隊だ。対空砲火など、さほどのことはあるまいとタカをくくっていたが、意外に密度が高い。

数十発の両用砲弾が同時に炸裂し、爆煙が黒雲のように立ち込める。

爆撃手席の森から、変針の指示はない。

大泉機は、元山空の先頭に立ち、敵艦隊の上空へと突進する。

対空砲火が熾烈さを増す。

前方で、左右で、敵弾が次々と炸裂し、真つ赤な爆炎が周囲に湧き出す。

あたかも、活火山の真上を飛んでいるようだ。火山弾ならぬ弾片が機体を叩き、爆風が機体を煽る。

ともすれば、投弾コースから外れそうになるが、大泉は森の指示通り、まっすぐ敵艦隊の中央を目指

している。

（何機が残っているか）

その思いが、ちらと脳裏をかすめる。

後続する二機全てが健在だとは思っていない。

F4Fの迎撃と、それに続く対空砲火に撃墜された機体があるはずだが、後方を振り返って残存機を確認する余裕はない。

嚮導機の機長としては、一機でも多くの陸攻が投弾するよう祈るだけだ。

「用意——」

伝声管を通じて、森の声が届いた。

エンジン音と風切り音、敵弾の絶え間ない炸裂音の中にあって、その声ははっきりと聞き取れた。

「てっ！」

鋭い叫びと同時に、一式陸攻が僅かに上昇した。

ラバウルからツラギまで、五八〇哩の距離を運んで来た二五番——二五〇キロ爆弾二発を投下した反動で、機体が僅かに上昇したのだ。

「後続機、投弾しました！」

副操縦員の武藤治二等飛行兵曹が報告した。

何機が投弾に成功したのかは分からないが、大泉機は嚮導機の役割を果たしたのだ。

指揮官機が速力を上げ、大泉機の前に出る。

右に大きく旋回し、編隊を誘導する。

大泉も二番機の位置に付け、指揮官機に続く。

ちらと海面に目をやると、海上の六箇所から立ち上る黒煙が見える。

元山空は輸送船と護衛艦艇を合わせ、六隻に爆弾を直撃させたのだ。命中率の悪い水平爆撃にしては、まずまずの成績と言える。

大泉が顔を正面に向け直したときだった。

不意に、指揮官機の右上方から青白い火箭が噴き延び、右主翼に突き刺さった。

「……！」

大泉が叫び声を上げたときには、指揮官機の右主翼から炎がしぶき、急速に燃え広がりはじめていた。

指揮官機は炎と黒煙を引きずりながら、みるみる高度を落とし始めた。

数秒後、右下方で爆発が起こり、巨大な火焰^{かえん}が湧き出した。

一式陸攻は主翼のほとんどを燃料タンクに使用することで航続距離を伸ばしているため、被弾時に発火しやすい。

指揮官機はその弱点を衝^つかれ、撃墜されたのだ。たった今、指揮官機を墜としたF4Fが、大泉機に向かつて来る。

機首と右側方の旋回機銃が火を噴き、後続する僚機^{りょうき}も、旋回機銃を放っている。

多数の射弾を集中されたF4Fが、射撃の時機^{じき}を狂^{くる}わされたのか、急降下によって離脱する。

陸攻隊を狙っているF4Fは、一機^{いちき}だけではない。左前方にも、複数のF4Fが見える。

「直掩隊^{ちよくんたい}はどうした?！」

「見当たりません。先に引き上げたようです!」

大泉の問いに、武藤^{ぶどう}が追い詰められたような声で返答した。

「時間切れか……」

大泉は思わず呻^{うめ}いた。

ラバウルからツラギまでの距離五八〇哩は、零戦の行動半径ぎりぎりだ。

落下式増槽を付けても、ツラギでの空戦時間は一〇分程度しか取れない。

彼らは投弾終了まで待ち切れず、一足先^{ひとあしき}に引き上げたのだろう。

だがそれは、陸攻隊を無防備のまま放り出すことにもなった。

元山空の残存機は、被弾炎上した艦^{ふね}の仇^{かたき}を討たんと戦意を燃やしているF4Fの銃火にさらされようとしている。

大泉は、正面^{みす}を見据えた。

指揮官が戦死した今、次席指揮官に編隊の誘導^{ゆだ}を委ねるべきだが、編隊を組み直している余裕はない。

自分が先頭に立ち、F4Fを突破するのだ。

「行くぞ！」

大泉は一声叫び、バンクによつて後続機に合図を送った。

エンジン・スロットルをフルに開いた。

三菱「火星」一型が猛々しい爆音を轟かせ、一式陸攻が加速された。

F4Fの機影がみるみる膨れ上がり、その両翼に発射炎が閃いた。

2

「MI作戦は中止する。同作戦のために準備した部隊は、南東方面に向ける。他の選択肢はあるまい」
軍令部第一部長福留繁少将は、殊更ゆつくりと言った。

東京・霞ヶ関の軍令部次長室だ。

福留の他、次長の伊藤整一中将、第一課長富岡定

俊大佐、第二課長田口太郎大佐、第二部長鈴木義尾少将、連合艦隊司令部から派遣された政務参謀岡崎勲中佐、戦務参謀渡辺安次中佐らが顔を揃えている。

福留の表情は、どこか苦しげだ。

連合艦隊司令部、特に司令長官山本五十六大将の強い反発を予想しつつも、立場上言わざるを得ないと考えている様子だった。

「南東方面は、緊迫した状況にある」

富岡第一課長が、机上に広げた南方要域図の一点——ツラギを指した。

「米豪分断作戦を完遂するためには、ソロモン諸島の制圧が不可欠だ。そのために、モレスビーと合わせて、ツラギを攻略したのだ。ところが米軍は、ツラギを奪回することでソロモンに楔を打ち込んで来た。これを放置しては、先には進めぬ。なんとして、ツラギを再攻略する必要がある」

ラバウルの第二二航空戦隊司令部から緊急信が飛

び込んだのは、この日の午前七時三六分だ。

電文は、

マルヨンヒトフタ

「本〇四一二（現地時間六時一二分）、『ツラギ通信基地』ヨリ敵機動部隊来襲ノ報告アリ。〇六一〇、

マルロクヒトマル

『ツラギ通信基地』『横浜航空隊』トモ通信途絶セリ。〇七三六」

マルナナサンロク

と伝えていた。

このとき、MI作戦の先鋒となる第一航空艦隊は、広島湾から出港寸前だったが、連合艦隊司令部は、

「出港待テ。機動部隊ハ別命アルマデ広島湾内ニテ待機セヨ。〇七五五」

マルナナゴゴ

と命じた。

山本の目は、既にMI作戦に向けていたと思われるが、確保したばかりの要地に米軍が来襲したとなれば、見過ごすわけにはいかない。

MI作戦を当面延期し、情報収集に努めると決めたのだ。

ラバウルの二二航戦司令部やトラックの第四艦隊

司令部から続報が入電するにつれ、ツラギの戦況が明らかになった。

この日の一〇時までには、ツラギが米軍に奪い返されたこと、同地に進出していた横浜航空隊や陸上守備隊が壊滅したことが判明した。

空母を伴っていることが判明した。

「MI作戦実施の可否、並びに南東方面の戦局について協議の要あり。参謀一名乃至二名を派遣されたし」

一〇時三〇分、軍司令部からこの連絡が連合艦隊司令部に届いたため、山本は岡崎と渡辺の二名に、軍司令部への出張を命じた。

岡崎は、戦艦「陸奥」の空母改装案について協議するため、艦政本部に出かけた直後であったから、慌ただしく東京にとんぼ返りすることになった。

「私としては、MI作戦はあくまで実施すべきだと考えている。この戦争を短期で終わらせる道は、それ以外にはないと信ずるが故だ。その点を、しっか

りと軍令部に説明して貰いたい」

山本は二人に、そう言い渡している。

山本はミッドウェー島を攻略した後、ハワイに進め、米国から反攻の手段を奪った上で講和に持ち込むことを考えていたのだ。

山本に忠実な渡辺はともかく、岡崎はMI作戦の意義に疑問を持っている。

ミッドウェーの占領は可能であろうが、その後の維持は極めて困難であると考えるからだ。

だが、政務参謀の立場上は、長官の戦略構想を軍令部にきちんと伝えることが求められていた。

「ツラギは、我が軍の進撃路に立ち塞がった障壁であると同時に、反攻の拠点ともなり得る地だ。放置すれば、米豪分断作戦が互解の危機にさらされるだけではない。米軍がソロモンを北上し、ラバウルに迫る可能性も考えられる」

富岡に続いて、福留が言った。

（軍令部は、我が方の重要拠点が将棋倒しのよう

に陥落することを恐れているのか）

福留や富岡の言葉を聞きながら、岡崎は腹の底で呟いた。

中部太平洋における日本軍の最重要拠点はトラック環礁だが、そのトラックを城に見立てた場合、ラバウルは外堀に相当する。

仮にラバウルが陥落すれば、トラックは米重爆の空襲圏に入り、艦隊泊地として使えなくなってしまうのだ。

福留や富岡が危機感を抱くのも無理はないが――。

「MI作戦は、既に動き出しております。機動部隊や主力部隊はまだ内地に留まっておりますが、攻略部隊は昨日、サイパンより出港し、ミッドウェーに向かつております。一旦動き出したものを止めるのは、いかがなものでしょうか？」

反論を試みた渡辺に対し、鈴木第二部長がこともなげな口調で言った。

「呼び戻せばよからう。今なら、まだ間に合う」

「ツラギが陥落しても、重大な脅威になるでしょうか？ 同島には、飛行場の適地がありません。ラバウルが、すぐに敵の攻撃にさらされるとは考えられません」

渡辺に続いて、岡崎が反論した。

岡崎は、M I 作戦には懐疑的だが、ツラギに対する攻撃が、本格的な反攻の開始だとも考えていない。米太平洋艦隊は、四月から五月にかけて三隻の空母を失い、現在稼働状態にある空母は二隻程度と考えられるためだ。

日本側は、「瑞鶴」「翔鶴」の二隻が後方に下がっているものの、第一航空艦隊には四隻の正規空母が健在だ。

この状況で、米軍が反攻に転じるとは考え難い。ツラギの奪回は威力偵察か、日本軍の目を逸らすための陽動ではないか。

「ツラギの南にある島を問題にしている」

富岡が、指示棒でソロモン諸島の中央を指した。

ソロモン諸島の中では、大きめの島だ。ツラギは元より、フロリダ島よりも大きい。

ガダルカナル島と記されている。

「この島には、飛行場の適地がある。密林を切り開いて整備すれば、ラバウルにも劣らぬ大規模な航空基地を建設できる。軍令部としては、M O 作戦終了後、速やかに設営部隊を進出させ、飛行場の建設にかからせるつもりで準備を進めていた」

「その前に米軍が来た、というわけですか」

岡崎の言葉に、福留が頷いた。

「その通りだ。ソロモン諸島が豪州領であることを考えれば、同地の地理情報は米国にも伝えられていると見るべきだろう。米国がツラギの攻略に続いてガダルカナルに進出すれば、ラバウルから五八〇哩の位置に、敵の一大航空基地が出現しかねない」

南方要域図を見つめる福留の顔に、憂悶の表情が浮かんだ。

中部ソロモンを敵に押さえられることで、米豪分

断作戦が瓦解する可能性、更にラバウルが危機にさらされる可能性を恐れているのかもしれない。

「軍令部としては、連合艦隊^G_Fの主力は南東方面に向けるべきだと考える」

それまで沈黙^{ちんもく}していた伊藤整一次長が、重々^{おもおも}しい声で言った。

「米軍がツラギやガダルカナルに橋頭堡^{きやうとうぼ}を築^{きず}く前に叩^{たた}き潰^{つぶ}し、反攻の芽を摘むべきだ。また、我が軍がソロモンに進出すれば、米豪分断作戦の完遂に近づく。うまくすれば、その時点で豪州の中立化が期待^{たい}できる」

(主導権^{しゅどうけん}を握^{にぎ}るのが狙いか)

「米豪分断作戦の完遂^{ひんたい}」という一言から、岡崎は軍令部の意図^{いとう}を読み取った。

軍令部は、海軍全体の作戦を立案^{りつあん}し、海軍各部隊の運用を行う機関だ。

連合艦隊も、本来は軍令部が立案した作戦に従って動かねばならない。

ところが今回の戦争では、軍令部は連合艦隊司令部、というより山本連合艦隊司令長官に引きずられることが多かった。

開戦劈頭^{へきとう}の真珠湾攻撃は山本の主導で実施されたものだし、第二段作戦にも、山本の主張が色濃^{いろこ}く反映^{えいへん}されている。

MI作戦に連合艦隊主力の大部分を投入するなどは、その最たるものだ。

伊藤次長や福留第一部長ら軍令部の幹部が、この状態^{じかた}を苦々^{にく}しく思っていたであろうことは想像に難^{かん}くない。

軍令部はツラギ陥落を奇貨^{きか}として、山本の手から主導権を奪い返そうとしているのではないか。

「お言葉を返すようですが、豪州の中立化は、必ずしも対米講和に結びつかないのではありませんか？ 米国、特に海軍の対日戦略は、中部太平洋の侵攻です。その戦略に、豪州は不可欠の要素ではないと考えますが」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。